



4. 施工について

Q4-1：施工時の厚さ管理はどうしていますか？

A：巻付け耐火被覆材は、製造工場での検査に合格した製品です。従って施工時の厚さ検査は不要となります。
現場においては、納入時に製品の厚さを確認して施工します。

Q4-2：被覆する鉄骨に下地処理は必要ですか？

A：施工に際して特別な下地処理は必要ありません。
ただし鉄骨に錆やセメントノロが多い場合は溶接性に影響を与える場合がありますので、あらかじめ取り除く必要があります。

Q4-3：不織布端部（耳）の接着は必要ですか？

A：耐火認定上で接着作業は不要ですが、意匠上で接着を求められる場合は、以下の接着剤を推奨しています。（接着剤によっては施工後に黄変したり、剥がれが発生する場合がありますので注意が必要です。）

推奨接着剤 コニシ(株)製 Z3スプレー

スリーエムジャパン(株)製 ニューダクトスプレー

Q4-4：他職種工事との同時作業は可能ですか？

A：施工時に粉じんの発生はほとんど無く、繊維の飛散養生を必要としないので、他職種との併行作業が可能です。

Q4-5：施工時の養生は必要ですか？

A：条件によって養生は必要となります。
雨水がかかる場合は雨養生を行い、巻付け耐火被覆材に水がかからないように配慮してください。
また、外壁の取付け前に施工する場合は、防風ネット等の養生をしてください。

Q4-6：固定ピンを溶接する時の火花養生は必要ですか？

A：溶接時に溶接部は巻付け耐火被覆材に覆われ、溶接火花が外部へ飛散しにくいため、基本的に養生は不要です。
但し、溶接の近くに可燃物やガラス類がある場合は、不燃クロスや防災シート等で養生をしてください。

Q4-7：コーナー部分等が施工時に潰れる事がありますが耐火性能上影響はありません

A：耐火試験に使用する試験体は現場と同様に施工します。
コーナー部分がつぶれたり、ピン溶接部分の材料厚さが薄くなりますが、その状態で耐火性能を確認していますので問題ありません。

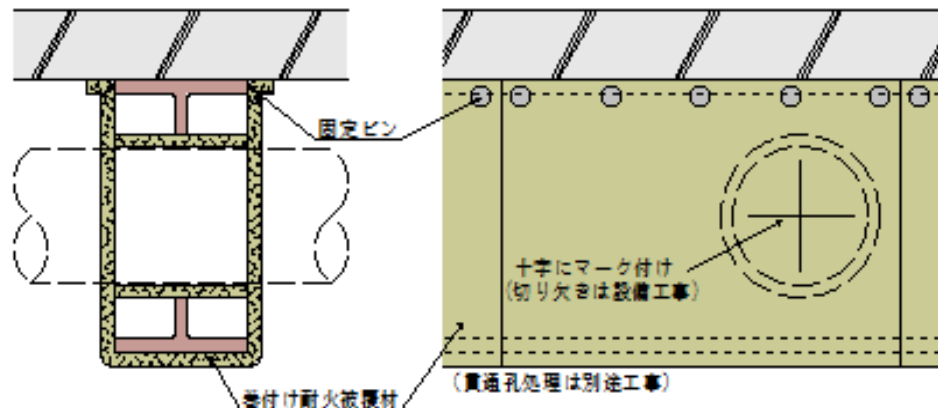
Q4-8：デッキプレートとの隙間処理はどうすればいいですか？

A：巻付け耐火被覆材で隙間をふさいでください。
隙間の奥行きは被覆材の厚さ以上詰め込んでください。

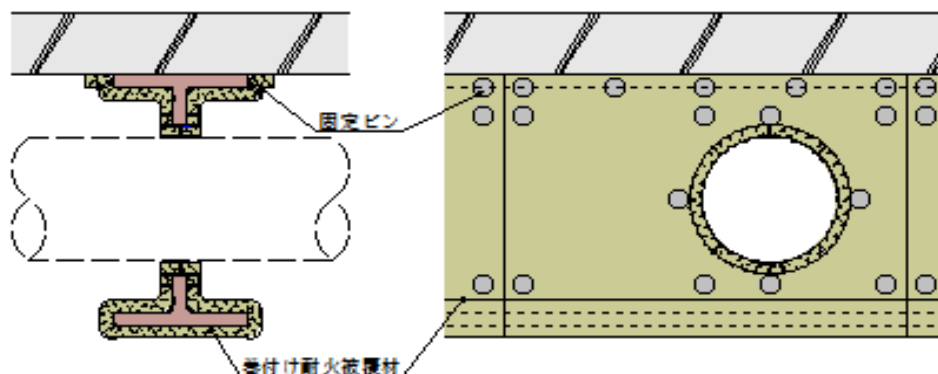
Q4-9：はり貫通部の処理はどうすればいいですか？

A：配管やダクトの貫通部は、はりの耐火被覆材とダクトの耐火被覆材が下図のように連続して、鉄骨が見えない様に処理することが必要です。

箱貼りの場合



直貼りの場合

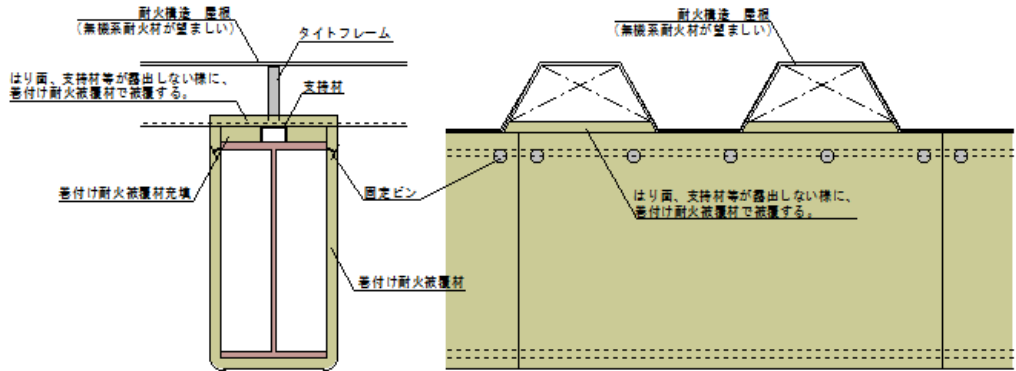




Q4-10：折板屋根とはりとの取り合い部の処理はどうすればいいですか？

A：下図の様に、はりに対して4面巻きにして施工してください。

ただし、はりが防火区画にあたる場合は遮炎性が必要となり、鋼板1.5mmを設けることで満足しますが、更に遮熱性も担保する為に、はりの上に厚さ1.5mm以上の面戸を設けて巻付け耐火被覆材を施工する場合があります。



Q4-11：CFT柱は鋼管柱の認定をつかってもいいですか？

A：鋼管柱の認定は使用できません。CFT柱の認定を使用してください。

Q4-12：施工時の粉じんはどの程度ですか？

A：人造鉱

①個人暴露濃度

巻付け作業 繊維数濃度0.09 f/ml

切断作業 繊維数濃度0.03 f/ml

②作業場内濃度

巻付け作業周辺 繊維数濃度0.01～0.10 f/ml

切断作業周辺 繊維数濃度0.03～0.06 f/ml

測定方法：繊維数濃度測定法

測定場所：埼玉県某倉庫

測定機関：(株)エフアンドエーテクノロジー研究所

測定日：2017年11月29日

測定日：2017年11月29日